**メッセージのレジュメ**

**2021年5月30日（日）**

**聖書箇所：エステル記５章１節～２節**

**タイトル：「エステル記に見る神の救いのご計画」**

**◎　エステル記のあらすじ**

**１．エステル王妃への道**

エステル記の主要登場人物：（１）**エステル**、（２）エステルの従兄であり養父でもあった**モルデカイ**、

（３）世界最大の権力者ペルシャの王、**アハシュエロス王**、

（４）王の側近であり総理大臣的な存在であった**ハマン**

1. 王のメンツによって王妃が退けられる。
2. 王妃選び：１２７州の中から選りすぐりの美女が集められる。
3. エステルが王妃となる。

「エステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた」（エステル記２章１５節）

エステルは、バビロン捕囚によって捕え移されてきた奴隷の子孫。また孤児であった。当時の一般常識からすれば、あり得ない出来事であった。

**２．ユダヤ民族根絶計画**

エステル記の主要登場人物のエステルの従兄であり、養父であったモルデカイとハマンとの衝突。

モルデカイは、ひれ伏し、ひざまずくのは、神のみであると固く決心していたので、ハマンにひざまずかなかった。そこでハマンは、モルデカイのみならず、モルデカイがユダヤ民族であることを知るや否や、ユダヤ民族ごと根絶やしにする計画を立て、王からの許可をいただく。くじによってユダヤ民族根絶の日取りが何と約１年後と決まる。

**３．モルデカイとエステルのやり取り**

　モルデカイとエステルは、使者を通じてやり取りし、ユダヤ民族のために王にとりなすようにエステルに懇願する。そしてこの時のためにこそ、あなたは、王妃として選ばれたのではないか、神の選びと使命を思い起こさせた。

　エステルは、そのモルデカイの促しによって立ち上がると同時にユダヤ民族に３日間の断食（祈り）を要請した。

**４．王の前に**

　三日目にエステルは、王の前に立つと、エステルは王の好意を得て、王の金の笏が伸ばされた。

・エステルのお願い

　自分と王様とハマンの３名のみでの宴会の開催。

・１日目の宴会が終了後、エステルは、明日も３名のみでの宴会をお願いする。

・王様　⇒　その夜眠れず、王の記録書を読んでもらい、そこでモルデカイの功績を知る。

・ハマン⇒　モルデカイに憤りを覚え、２２mの木を立て、モルデカイを殺す計画を立てる。

**５．宴会二日目**

・王様　⇒　モルデカイへの褒美を検討。

　ハマンの提案によってモルデカイへの褒美が決定。

・ハマン　⇒　一気に形成不利となる。

・エステル　⇒　王様にハマンの策略を告げ、その取り下げを願う。王は、その願いを聞き入れ、

王妃とユダヤ民族に対して、謀略を企てたハマンは、モルデカイのために準備した木に

自らがかけられる。

**１．エステル記を通して表された神様の摂理**

クリスチャンに与えられた特権の一つが、神の摂理を信じて生きることができるということ。

摂理は、英語でprovidence。元々は英語のprovide。

Provide：必要なものを前もって備えておいて提供するという意味。

神の摂理を信じて生きるとは、目の前に起こる現実がすべてではなく、すべてのことの背後で歴史を導いておられる主がおられ、その方が前もって必要なものを備えておられるということを信頼して生きるということ。

●　エステル記に見る神の摂理

（１）捕虜の子孫であったエステルが王妃として選ばれる。

（２）王の暗殺計画をモルデカイが知り、エステルに伝え、それが宮廷日誌に記される。

（３）エステルが宴会を一日延ばすことによってその晩、王が宮廷日誌を読み、モルデカイに栄誉を

与えようと考えたこと。（王が眠れなかったことも）

このどれか一つでも狂っていたならば、ユダヤ民族根絶計画を防ぐことはできなかった。

* 神の摂理を信じて生きる者とそうでない者の違い

エステル：民族絶滅の危機の中にあっても祈りを要請し、落ち着いている。

　　　　　すべての出来事、また自分のいのちも主も御手の中にあると信じ、委ねている。

ハマン：彼には富も地位も権力もありましたが、モルデカイ一人のふるまいに支配されている。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」（ローマ８章２８節）

**２．ハマンに見る人間の罪深さ**

・ハマン：自分勝手で、感情の起伏が激しく、人を人とも思わないひどい人物。

しかし事の大小はあっても私たちの内にもハマンの姿がある。

→　自分の思い通りにならないとそれを妨げる者を押しのけ、自分の心の中で抹殺し、自分の心を治める。自分の心を必死で保つために、様々なものによって自分の心を満たそうとする。

・最後にハマンは、自らがつくった木にかけられて終わり、私たちは自業自得、一件落着と思うかもしれない。しかし私たちがハマンの姿に自分自身の姿を重ね合わせることができるならば、神様の御前に自分勝手に生きてきた私たちが、どれほどひどい者であり、神様を悲しませてきたのかに気づかさる。そして私たちこそハマンと同じように木にかけられて死ななければならない存在であった。

・しかしそれにも関わらず、イエス様は、そんな私たちのためにさえ生かすために十字架において自らの命と引き換えに私たちを生かして下さった。

・私たちが最悪であった時にさえ、神様は、最高のひとり子なるイエス様を与えて下さった。神様の摂理を信じて生きるとは、まさにこのように私たちを愛してやまない神様の愛を信頼して生きるということ。

「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」（ローマ８章３２節）